

役割を果たすと思います。企業はすぐ東京へ本社を移しますが、大学はそうではありません。大学は地場産業、それも頭脳のある地場産業であるという視点で見れば、人材も含めてとても大きな知的ストックがありますね。近畿2府4県には、短期大学も含めて100を超える大学があります。知恵の時代といわれるなか、そうした大学がネットワークをつくり、知的ストックを活用することはとても重要なことでしょう。京都には50の大学が参画する『大学コンソーシアム京都』があります。関西プレスクラブでも、関西を牽引する知的ソースとして13の大学に賛助会員として加盟してもらっています。我々はそういう場を利用してできるだけ大学情報を発信したり、定例会でも経済人だけではなく、大学から人を招いてお話ししてもらっています。大阪大学の鷺田総長にも一度お越しいただきました。そこで阪大が市民と一緒に動きはじめたというお話をいただき、私たちが大きな期待を持って見えています。

武田 ありがとうございます。大学が地場産業であるという視点に新鮮な思いをいたしました。また、大学に非常に熱い期待をもっていることを、とてもうれしく思います。先ほど大学力は人材力に尽きると申しましたが、いい人材を得るためには偏差値ではなく、地域の活力が影響してきます。つまり、まちが魅力的であればあるほど、素晴らしい学生たちを引き寄せます。だからこそ大阪大学は、大阪の活性化に力を入れようとしているんです。また、地場産業としての大学も、これからはネットワークを組んでやっていく必要性を感じました。

堀井 田中さんは関西財界セミナーで、関西の各都市はそれぞれの地域でユニークな発展をしているけれど、バラバラではだめだとおっしゃっていますね。

田中 関西には大阪、京都、奈良、和歌山、神戸など、素晴らしいアイデンティティをもつ都市があるのに、残念なことにユニオンになっていない。個々バラバラで、ガバナンスもない。あげくには大阪文化は「お笑い」だなんて東京にきめつけられている。だから関西が立ち上がる意欲を示そうということで、関西財界セミナーで「初夢2020年・United States of KANSAI・関西合衆国」というプレゼンテーションを行いました。関西合衆国をつくればオリンピックだって、サミットだって誘致できます。今、日本全国でビジットジャパン1000万人というキャンペーンが展開されていますが、関西合衆国だけで1000万人はクリアできるでしょう。AU（アジア連合）の本拠地も大阪にもってこられる。そうすれば素晴らしい大阪に甦るんじゃないかという、夢のある話をさせていただきました。

堀井 外国には、文化によって寂れたまちを憧れのまちに変えた例がたくさんあります。ナント（フランス）、ビルバオ（スペイン）、サンアントニオ（アメリカ）、セントポール（アメリカ）などは、重厚長大産業の衰退で錆び付いたまちを、文化の力で見事に甦らせ、世界的知名度を得るに至りました。文化というのは不要不急な穀潰しではなく、都市再生の切り札になるという証明です。ナントのエロー市長は、「市民の文化に対する意識があって、芸術や文化を鑑賞する市民が育ったことが鍵だ」といっています。

萩尾 行政の役割は自ら先頭に立って文化をつくることではなく、それが育つ環境整備を行う、いわば旦那なんですね。そこで民が自由に文化活動に専念する。行政は旦那役に徹して、能力ある民間人にプロデュースを任せれば、そこに中心となって活躍する人が出てくるでしょう。そうすることで都市が活性化していく。例えば新緑や紅葉の美しい時季の御堂筋を10日間ほど開放して、そ

